

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00935

研究課題名（和文）牛車の中世的展開に関する研究 文献とモノによるアプローチ

研究課題名（英文）A Study on the Medieval Development of the Oxcart("Gissha"): A Literature and Objects Approach

研究代表者

木村 真美子 (Kimura, Mamiko)

学習院大学・付置研究所・研究員

研究者番号：10815062

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：中・近世に残された牛車関係史料の読解を進めた。具体的には、尊経閣文庫所蔵『車輿等書』、陽明文庫所蔵『輿車雑要抄』、宮内庁書陵部所蔵『自宝曆至文久御車新調並修復書類』という、3点の重要史料の翻刻を作成した。後者2点については、成立等を検討する解題を付し、研究成果報告書において全文翻刻を公表した。

あわせて、現在も葵祭に使用されている宮内庁京都事務所の牛車2台について、現物調査を実施し、正確な実測を行った。さらに、上記の文献の検討により2台とも18世紀の製作であると判断されるに至ったが、製作が先行すると考えられる杏葉車について、10分の1サイズの構造模型ならびに20分の1サイズの模型を製作した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

9世紀にはじめて日本で人が乗用するための車（＝牛車）が登場して以来、現在に至るまで車文化は続いている。なかで、京都御所に所在する2台の牛車は、前近代から続く車文化の賜物であるにも関わらず、その来歴は全く不明と言わざるを得なかった。2台とも鎌倉時代に描かれた牛車絵（車図）と類似の形態を有し、特に江戸時代初期の中和門院の乗用した尼眉網代庇車と同様の形態を有している。そのため、中世末期の制作にかかる可能性が高いと想定したが、史料を博捜し、江戸時代後期の牛車の修理関係史料などを読み進める中で、八葉車は1780年代の制作であること、杏葉車はそれ以前に作られた可能性の高いものであることが判明した。

研究成果の概要（英文）：We have been reading and analyzing historical documents related to oxcarts ("Gissha") remaining from the Middle and Early Modern periods. Specifically, we have made reprints of three important historical documents: "Shayotousho" owned by Sonkeikaku Bunko, "Yoshazatsuyoushou" owned by Yomei Bunko, and "Okuruma Shinchou Narabini Shuhukushorui" owned by the Imperial Household Agency's Shoryou Department. The latter two were reprinted in their entirety in the research report with explanatory notes on their formation, etc.

In addition, we conducted an on-site survey of two oxcarts of the Kyoto Office of the Imperial Household Agency, which are still used for the Aoi Matsuri Festival, and accurately measured them. Furthermore, we made a 1/10th size structural model and a 1/20th size model of the Gyoyouguruma, which is thought to have been made earlier than the other two, although both were determined to have been made in the 18th century based on the above literature review.

研究分野：日本中世史

キーワード：八葉車 杏葉車 京都御所 牛車 陽明文庫 洞院家 輿車雑要抄

1. 研究開始当初の背景

牛車は、前近代の貴族たちの移動手段として、平安時代中期から鎌倉・南北朝時代をピークに多用された。室町時代以降は徐々に数を減らし、戦国時代以降は利用がきわめて稀になる。明治以降は、祭礼の行列のなかにのみ姿をとどめている。すなわち、牛車とは、古代中世の貴族社会を象徴する乗り物であるといえる。

牛車は、『源氏物語』以下の王朝文学において貴族社会を語る重要なアイテムとしての役割を果たしていることも与り、概論的な説明は少なくないが、個別研究の対象とされることは必ずしも多くない。そのうえ、牛車に関する説明のほとんどは、松平定信(1758~1829)が編んだ『輿車図考』(故実叢書所収)に根幹を依拠し、補助的に文学作品や記録上の所見や絵巻物を利用したものになっている。

『輿車図考』は、非常に優れた研究書だといえるが、今日の観点からすれば、松平定信が利用できた史料の制約は決して小さなものとはいえない。また、『源氏物語』の研究に資することを意図し、平安中期の有り様を基本としてとらえたようだが、時系列的な展開への配慮が希薄という弱点が指摘できた。貴族社会における家の確立とそれに応じた家格の固定化により、むしろ院政期以降に牛車の差別化がすすんだという側面を重視するならば、中世貴族社会における牛車のあり方に対する検討が不十分だということになる。

また、現存する牛車の中には、江戸時代から修理改変を加えつつ使用されているものがあるが、これを平安時代の牛車につなげて理解するには、中世における牛車の展開を明らかにしておくことが必須であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古代・中世の貴族社会を象徴する乗り物である牛車の有り様について、中世における展開を明らかにし、総体として牛車についての歴史や利用方法などの正確な理解を確立することである。

具体的には、以下2つの課題を設定した。

(1) 文献によるアプローチ：松平定信編『輿車図考』に依拠し、補助的に記録上の所見や絵巻物を利用するという、従来の研究の限界を見据え、掘るべき中世史料(牛車に関わる故実を含む有職書、「車図」と称される牛車の絵図。未翻刻のものが多く、既刊の場合も底本に問題のあるものが多い)を書誌レベルから検討して、活用するための基盤を作りだすとともに、中世における牛車の展開の様相を解明する。

(2) モノとしてのアプローチ：改変を受けながらも現存し、祭礼などに用いられている牛車について調査し、基礎的なデータを取得して、牛車の実相を知るための手がかりをつかむ。中心となる(1)の成果に(2)の知見を融合するため、工学系の研究者の協力を得て縮尺10分の1程度の模型の製作をおこなうことを目的に据え、製作で直面する課題を解決しながら中世の牛車の実像に迫ることを試みた。

3. 研究の方法

本研究を進めるにあたり科研費申請当初は連携研究者(この制度は翌年には廃止となり以後研究協力者)として木造建築を専門とする腰原幹雄氏(東京大学生産技術研究所教授)をお願いし、その後日本史の渡邊正男氏(東京大学史料編纂所准教授)にも研究協力者として参画をお願いし、研究代表者との3名による研究体制で、研究会(牛車科学研究会)を開催し、研究・作業を進めた。

(1) 文献によるアプローチとしては、前田育徳会尊経閣文庫に調査に赴き、中世における牛車研究の重要史料である『車輿等書』の写真的焼き付けを購入したことを皮切りに、宮内庁書陵部、江戸東京博物館、京都国立博物館、陽明文庫、京都文化博物館、石山寺、和泉市久保惣記念美術館、春日大社宝物殿等の各地の史料所蔵機関に赴き、必要史料の収集に努めた。そのうち特に重要であると判断された尊経閣文庫所蔵『車輿等書』、陽明文庫所蔵『輿車雜要抄』、宮内庁書陵部所蔵『自宝曆至文久御車新調並修覆書類』については、検討を重ね、翻刻を作成することとした。

(2) モノとしてのアプローチとしては、京都御所に収蔵される「八葉車」「杏葉車」という、最も由緒があり、なおかつ葵祭において現役として利用されている2台の牛車についての詳細な調査をおこなうことにした。ただし、当該の牛車がいつ作成されたものか、という疑問がはじめに生じた。この疑問を解決するためには、中世の牛車のみならず、近世の牛車の使用状況についても調査する必要が生じ、近世史料の調査という課題をあわせて追究することになった。京都御所の2台の牛車の調査について複数回にわたって諸元の調査をおこない(本研究実施以前におこなった調査では十分ではなかった点を重点的に調査した)、それにもとづき模型を製作することにした。

4. 研究成果

本研究の主要な成果は以下の通りである。

(1) 研究成果報告書

『牛車の中世的展開に関する研究 文献とモノによるアプローチ』(学習院大学史料館、2024年3月)

本報告書には、3本の論考を掲載した。

木村真美子、陽明文庫所蔵『輿車雑要抄』について 解題と翻刻

渡邊正男、宮内庁書陵部所蔵『自宝曆至文久御車新調並修覆書類』(付、牛車修理年表)

腰原幹雄、牛車主要諸元(牛車の構造、牛車実測データ集)

本研究の独自の点は、牛車について、文献によって検討するだけではなく、モノに即した検討を行なうことにあり、そのため研究代表者および研究協力者渡邊正男氏という文献に関する研究者とともに、木造建築を専門とする腰原幹雄氏が共同して研究をおこなった。京都御所に所在する牛車の調査を皮切りに、祇園祭の山鉾を製作する工房、絵画史料を所蔵する寺院などに赴き、あわせて牛車に関わる文献史料を持ち寄って議論を重ね、分野を超えて充実した研究を積み重ねることができた。

文献については、江戸時代の牛車研究の成果として、松平定信の『輿車図考』が著名であるが、それに先行するものとして、実際に牛車を利用した上級貴族近衛家熙の編著にかかるとみられる有職書、陽明文庫所蔵『輿車雑要抄』に注目した。同書はこれまで研究に利用されておらず、本報告書に翻刻および解題からなる史料紹介を収めた。なお、主要部分が南北朝時代以前に成立したもので、西園寺家分家の洞院家(清華家。室町時代後期に絶家)旧蔵であり絵画を含む重要史料である前田育徳会尊経閣文庫所蔵『車輿等書』について、翻刻を進めるとともに、成立や伝来を含めた解題的な研究を行ってきたが、いまだ成果を公開するまでには至っていない。

モノについて具体的な検討の対象としたのは、現存している牛車のうち、最も由緒があり、なおかつ葵祭において現役で利用されている京都御所所蔵の牛車である。

京都御所内の2台の牛車は、現在も利用されているため、実見する機会があり、写真や動画によって容易に確認することもできる。しかしながら、学術的な検討の対象として十分な調査はなされておらず、研究素材としての共有基盤が形成されていなかった。そこで、二台について宮内庁京都事務所のご協力を得て調査を実施し、精確な計測を行い、数値の提示とともに図面を作成した。さらに構造の詳細を検討するとともに、わかりやすく示すことも目的に、より古態を示している可能性のある「杏葉車」について10分の1サイズの構造模型および20分の1サイズの模型を作成し、本報告書には諸元・図面等を収めた。なお、基本的な牛車の測量データは、研究協力者の大石岳史氏(東京大学生産技術研究所准教授)に提供いただいた。

京都御所の牛車については、実は2台とも制作年代が明らかになっていなかったため、モノとしての検討とあわせて文献による検討もおこなった。江戸時代後期の朝廷における牛車制作および修理の実態を示す宮内庁書陵部所蔵『自宝曆至文久御車新調並修覆書類』に注目したことで、「八葉車」が1780年代の製作であり、「杏葉車」はそれを遡る時期の製作である可能性が高いことを明らかにすることができたことは大きな成果であったと考える。

(2) 杏葉車構造模型(10分の1スケール)

腰原幹雄製作

(3) 杏葉車模型(20分の1スケール)

腰原幹雄製作

(4) 主な発表論文等

木村真美子、『革曆類』、陽明文庫講座図録1、2020年3月

木村真美子、『天皇御元服部類記 延慶』、陽明文庫講座図録2、2021年3月

木村真美子、「二通の鷹司兼輔書状」陽明文庫講座図録3、2022年2月

木村真美子、『小朝拝関白宣下条々問答』、陽明文庫講座図録4、2023年2月

木村真美子、「後光厳天皇宸筆書状写」、陽明文庫講座図録5、2023年12月

渡邊正男、西園寺本「伝宣草」、学習院大学史料館紀要28、2022年3月

渡邊正男、「御教書札」について、アルケイア 記録・情報・歴史 18、2023年11月

(5) 講演・講座等

木村真美子、「牛車考 牛に引かれて内裏に参る」、公開講座『続・古典を読む 歴史と文学』、於長野県立長野高校金鶏会館、2019年2月2日

木村真美子、「近衛家が伝えた牛車絵巻」、筆の里工房企画展『宮廷文化を彩る絵画』講演会、於筆の里工房、2023年5月3日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村真美子	4. 巻 4
2. 論文標題 小朝拝閑白宣下条々問答	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 陽明文庫講座図録	6. 最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村真美子	4. 巻 3
2. 論文標題 二通の「鷹司兼輔書状」 『大手鑑』所収一条兼良書状の正体	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陽明文庫講座図録	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村真美子	4. 巻 2
2. 論文標題 天皇御元服部類記 延慶	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 陽明文庫講座図録	6. 最初と最後の頁 10～11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村真美子	4. 巻 1
2. 論文標題 革勘類	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 陽明文庫講座図録	6. 最初と最後の頁 24～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村真美子
2. 発表標題 牛車考 牛に引かれて内裏に参る
3. 学会等名 公開講座「続・古典を読む 歴史と文学」（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 徳仁親王・木村真美子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 4
3. 書名 陽明文庫 近衛家伝来の至宝	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------